

日本ケミカルバイオロジー学会第 19 回年会の開催に寄せて

京都大学 工学研究科 合成・生物化学専攻

浜地 格

今年で 19 回目となる日本ケミカルバイオロジー学会年会は、6 月 4 日（水）から 6 日（金）の 3 日間、京都大学桂キャンパスで開催されます。日本ケミカルバイオロジー学会の前会長である長田先生から突然お電話を頂戴し、今回の年会長を僭越ながらお引き受けした身として、ご挨拶を申し上げます。

年に一度、新緑の季節に開催されてきた年会は、日本ケミカルバイオロジー学会の中心に位置付けられる行事であり、国内のケミカルバイオリジストが一堂に会して、最先端の成果を披露する貴重な機会です。これまで年会では、口頭発表は 1 会場で実施という伝統が継承されてきたお陰もあり、当該分野のレジェンドから中堅・若手研究者が一堂に会して、様々な視点から熱心な議論が繰り広げられてきました。そのため、若いケミカルバイオリジストにとって年会での口頭発表自体が目標であり、自分が見つけた新しい発見・成果を自身の個性とともにアピールしながらトレーニングを受ける貴重な場になっていると思われまます。同時に、この 3 日間の発表を聴くだけで、我が国のケミカルバイオロジーのレベルの高さを実感し、最新のトレンドを窺い知ることも出来る素晴らしい舞台です。本年の年会もこのような伝統を引き継ぎつつ実施したいと考えております。幸い、口頭発表 62 件、ポスター発表 143 件という昨年度の東京地区開催を上回る申し込みを頂き、コロナ禍で延期やオンライン開催を余儀なくされた困難な状況からの完全回復を、実行委員の先生ともども、嬉しく実感しているところです。今回は、広い船井講堂の利点を活用して、ポスターは初日から最終日まで貼りっぱなしとしました。ポスターの発表自体は 2 日目と 3 日目の早い時刻に（軽い朝食とともに）行いますが、随時お時間ある時にお立ち寄り頂き、チェックすることもできます。また Robert Campbell 先生、岩田想先生、跡見晴幸先生、沼田圭司先生による、化学と生物学の境界領域の幅広めのトピックスをカバーした招待講演の他に、各種展示や Zeiss、Bruker、Thermo 主催のランチョンセミナーも 3 日間に渡って行いますので、お楽しみ頂ければ幸いです。

2025 年は、国内外のケミカルバイオロジーにとって、メモリアルな年とも言えます。何人もの先生がこれまで巻頭言に書かれているように、本学会の前身の研究会が長野哲雄先生（初代日本ケミカルバイオロジー学会長）を中心に立ち上がった 2005 年からちょうど 20 年です。私自身は、本学会創立時に長野先生からお誘いを受け、世話人に名前を連ねさせてもらった者ですが、末端で傍流の若輩者にも声をかけて頂いたことを今も心に留めおいています。2025 年はまた、Nature Chemical Biology が創刊 20 年を迎えました。これを記念した 1 月号の中で、この 20 年の驚くほどの発展と分野の広がりが Editorial preface と Sarah O'Connor, Ben Cravatt, Chengqi Yi の「Reflecting on 20 years of progress」に纏めてられて

います。また、これから 10 年の多彩な未来が David Liu, Chris Chang, Tom Muir, Herbert Waldmann などの寄稿「Thoughts for the future」として予測されていて、興味深いです。世界のリーダー達の見識に目を通しながら、ケミカルバイオロジーが既にある時代に教育を受けたケミカルバイオロジスト native が飛躍する次の 20 年を見据えた取り組みが、日本ケミカルバイオロジー学会にも必要な時期なのかもしれない、という感慨を抱いたのは私だけではないでしょう。

さて、今回会場となる京大桂キャンパスは、京都大学で吉田地区、宇治地区に続いて 20 余年前に開かれた 3 つ目のキャンパスです。京都市西京区に位置し、桂離宮から少し山側にあります。京都の東山文化は 1000 年以上の歴史を誇りますが、西山には（ほぼ）文化無し・・・という状況を変えるべく、京大工学研究科がこれから 1000 年の西山文化を先導するために移転したという joke (?) を聞いたように記憶しております。京都タワーをはじめ京都の市街地から比叡山までが見渡せる桂の地で、ケミカルバイオロジーのこれからの想いを馳せつつ、様々な情報交換と熱のこもった討論を満喫して頂ければ、実行委員一同大変嬉しく思います。